根治的腎摘出術後再発を来しインターフェロンが有効であった腎細胞癌十二指腸転移の1例

杉田 光司 北川敬丈 吉田由紀子 中島 弘幸
 又木 紀和 吉村 昇 池松 弘朗 竹林 晃一
 小野寺大吾 松崎宏治 加藤 真吾 青野 茂昭
 穂苅 量太 川口 淳 永尾 重昭 三浦総一郎

要旨：腎細胞癌の十二指腸転移は比較的稀であり，またインターフェロン治療により十二指腸転移巣の消失を認めた報告はほとんどない。我々は腎細胞癌の十二指腸への転移再発に対してインターフェロンが有効であった一例を経験したので報告する。症例は55歳の男性で，昭和61年に当院にて右腎癌に対して根治的右腎摘出術が施行された(RCC：tubular type, mixed subtype, G2, pT2, pN0, pM0, pV0)。

以後再発を認めなかったが，術後13年目の検診にて貧血ならびに便潜血陽性を指摘され，当科を紹介され受診した。平成11年3月の上部消化管内視鏡検査にて十二指腸球後部に約1.5cm大の発赤した粘膜下腫瘍様病変を認め，生検にて腎癌の十二指腸への転移と診断された。入院後，他に脾・肝・左肩甲骨・左肺の転移巣にも再発を認め，泌尿器科にてインターフェロン治療を施行した。十二指腸腫瘍の縮小を認め，平成12年2月には肉眼的に腫瘍は消失し，同部位よりの生検においても腫瘍像は認められなかった。

〔Key Words〕 十二指腸腫瘍，腎細胞癌

はじめに

腎細胞癌は肺，肝，骨への血行性転移を比較的多く認める。本症例は腎癌根治的術後13年を経て，肺，肝，骨のほかに十二指腸，脾などの転移巣に再発が認められたが，インターフェロン治療により十二指腸への転移巣の消失を認めたので報告する。

症例：55歳，男性。

主訴：貧血，便潜血陽性。

既往歴：平成9年に帯状疱疹。

家族歴：特記事項なし。

現病歴：昭和61年腰背部痛を自覚し，泌尿器科を受診した。腹部CTが施行され，右腎癌の診断にて根治的右腎摘出術が施行された。病理診断は腺管混合型，INFβT2V0N0M0でstage IIであった。平成11年2月近医にて貧血を指摘されたため3月11日，当科にて上部内視鏡検査を施行し，腎細胞癌の十二指腸への転移による再発と診断さ

防衛医科大学校／第2内科

れ，3月30日当科入院となった。

入院時理学的所見：眼瞼結膜に貧血あり。黄疸なし。心肺異常なし。腹部正中に腎摘出術後の手術瘢痕を認めたが，平坦・軟で圧痛なく，腹水も認めなかった。

入院時検査所見：Hb 7.0g/dlと貧血を認め，腫瘍マーカーであるIAPが656μg/mlと軽度高値を示していた。

外来時上部内視鏡検査：球後部後壁に，径1.5×1cm大の発赤調の境界明瞭な隆起性病変を認めた(Color 1)。生検にてクロマチンの増量した類円型核と淡明な胞体を有する異型細胞が認められ，13年前の腎摘出時のclear cell carcinomaと類似性が認められたため腎細胞癌が十二指腸へ転移した再発と診断した(Fig. 1)。入院後，外来時よりも貧血が進行しているため内視鏡検査を行ったところ平皿状の深い潰瘍性病変を腫瘍表面に認めた。同部位よりの出血に対しHSE局注(血管周囲3個所に10ml)を施行した。5月12日には，潰瘍は再生性変化を起こした肉芽によ

Fig. 1 Clear cell carcinoma was revealed as the same as ones previously diagnosed before 13 years.

Fig. 2 CT scan showed the thickening of the duodenal wall and other enhanced spots were found in the liver and the pancreas.

り覆われていた。大腸内視鏡検査は異常を認めなかった。

腹部血管造影：動脈相にて十二指腸下降脚および肝内、脾体部に hypervascular な tumor stain を認め、血行性の孤立性多発転移と考えられた。

腹部 CT (Fig. 2)：十二指腸に肥厚が認められ、又同部位の他に肝、脾に動脈相にて enhance された像が認められた。

諸検査の結果、十二指腸、肝、脾、肺に転移巣を認めたため、同年5月よりインターフェロン α 300万単位、週2回投与が開始された。

平成11年9月に施行した上部内視鏡検査では十

二指腸腫瘍の縮小が認められ、形態としては、周囲が隆起し中央に陥凹を伴う腫瘍を認めた。平成12年2月の内視鏡では (Color 2)、腫瘍像は消失し、生検にて悪性所見は認められなかった。5月の内視鏡検査でも寛解状態が確認された。また、これ以外の転移先は不変であった。また、経時的に測定された IAP は不変であった。

考 察

腎細胞癌は、肺、肝、骨等へ転移する頻度が高く、消化管への転移の報告は少ない。腎癌の小腸への転移の頻度としては4%で、十二指腸転移と

なると空腸・回腸への転移よりもさらに頻度は低くなる^{1,2)}。本症例のように腎癌腎摘出術後10年以上経過した者の11%に晩期再発が認められるという報告もある³⁾。しかし、再発を生じるのに多年を要する理由は不明である。

腎細胞癌の転移経路としては、一般には血行性転移が最も多いとされるが、医学中央雑誌にて1987年より検索し得た限りでは、孤立性十二指腸転移はわずか5例のみで、直接浸潤による転移例よりも稀なものと考えられた。治療としての腎癌転移例に対するインターフェロン α の奏効率は、15.5%から35.7%で、20%前後との報告が多い^{4,5)}。その中でも肺転移に関してはより高い効果が得られることが多い。本症例のような孤立性十二指腸転移に対するインターフェロンの使用の報告は一例のみであり⁶⁾、また、HSEによる二次的効果も否定できない極めて稀な症例であった。

おわりに

根治的腎摘出術から13年後に再発を来しインターフェロンが有効であった腎細胞癌十二指腸転移の極めて稀な1例を経験したので報告した。

文 献

- 1) Lynch-Nyhan, Fishman EK, Kadir S et al: Dianisis and management of massive gastrointestinal bleeding owing to duodenal metastasis from renal cell carcinoma: The Journal of Urology. 138(3): 611-613, 1987.
- 2) 岡崎 誠, 宮本 敦史, 藤本 憲一, 他: 術後12年目に再発した腎癌の孤立性十二指腸乳頭部転移の一例, 外科, 58: 1898-1900, 1996.
- 3) Kanai T, Aoki A, et al: Successful Aggressive Treatment against Multiple Intra-abdominal Metastases from Renal Cell Carcinoma: Jpn J Clin Oncol 22: 216-220, 1992.
- 4) 滝川 浩, 香川 征, 吉本 純, 他: 腎細胞癌転移巣に対するインターフェロン α の効果, 西日泌, 51: 406-410, 1989.
- 5) 深貝隆志, 内藤善文, 丸山邦夫, 他: 転移を有する腎細胞癌に対するインターフェロン α の治療成績, 昭医会, 57: 354-359, 1997.
- 6) 横山 剛, 渡邊五朗, 橋本雅司, 他: 腎細胞癌術後, 孤立性十二指腸転移を切除し得た一例, 日臨外医学会雑誌, 56: 2521, 1995.

A case of metastatic duodenal renal cell cancer with effective interferon therapy long after curative nephrectomy

Koji Sugita	Yoshitake Kitagawa	Yukiko Yoshida	Hiroyuki Nakajima
Norikazu Mataka	Noboru Yoshimura	Hiroaki Ikematsu	Koichi Takebayashi
Daigo Onodera	Koji Matsuzaki	Shingo Kato	Shigeaki Aono
Ryota Hokari	Atsushi Kawaguchi	Shigeaki Nagao	Soichiro Miura

A 55-year-old male was admitted to our hospital due to anemia, who underwent the right total nephrectomy for renal cell cancer (R. C. C.) with curative operation in 1986. Endoscopic examination revealed a submucosal tumor with erosion on the top in duodenal bulb. The diagnosis was made as metastatic R. C. C. in the duodenum from the biopsy specimens. Several other examinations revealed that his metastases of the disease spreaded in the pancreas, the liver, the left shoulder blade, the left lung as well. Three million units of interferon α was administered intramuscularly twice a week for 36 weeks. The endoscopic examination after 16 weeks showed the reduction of the size of the tumor. Tumor was disappeared after 28 weeks,

and the pathological findings showed no malignancy.

Metastases of RCC have been often reported in the lungs, the liver, and the bones, but rarely done in the gastrointestinal tract. The effectiveness of interferon has been reported especially in the case of metastases to the lungs. This is a very rare case of metastatic RCC in the duodenum, which was diagnosed 13 years after curative right nephrectomy and for which interferon therapy was effective.

The Second Department of Internal Medicine, National Defense Medical College.

<カラーは2頁に掲載>